

令和元年5月27日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02053

研究課題名(和文) コプト・ディアスポラのネットワーク形成と異文化適応に関する比較宗教学的調査研究

研究課題名(英文) Comparative study of networking and cultural adaptation of Coptic diasporas

研究代表者

岩崎 真紀 (Iwasaki, Maki)

東洋大学・国際共生社会研究センター・客員研究員

研究者番号：10529845

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ムスリムが多数派であるエジプトの宗教的マイノリティであるコプト正教徒のうち、フランス、カナダ、日本に移住した人々をコプト・ディアスポラととらえ、彼らが移民として各ホスト社会にどのように適応しているか等についての現地調査に基づいた研究を行った。カナダでは比較的高学歴で裕福な信徒が多く、カナダ社会に適応している者が多いのに対し、フランスでは第一世代は専門職に就く者や経済的に豊かな者は少ない一方、第二世代は医師や大手企業勤務となった者もいるが、第一世代はフランス社会から疎外されていると感じている者が多い。日本では大学院生や駐在員とその家族など、一時的に滞在している者が多い。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、北米、欧州の各社会では、諸外国からの移民が急激に増加し、その受け入れ政策をめぐる大きな議論となっている国が少なくない。日本もまた、新たな法改正により、今後、外国人労働者の増加は必至である。そのような全世界的な趨勢のなかで、本研究が明らかにしたカナダのコプト・ディアスポラが収めつつある成功、フランスのコプト・ディアスポラが抱える課題、また、誕生したばかりの日本のコプト・ディアスポラの展開は、今後、より重要な意味を持っていくと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on diaspora communities of Coptic Orthodox Christians who are religious minority in Egypt. Fieldwork have been done in Suburb of Paris, France, Montreal, Canada and Kyoto and Tokyo, Japan to investigate how these different diaspora communities adjust the new environment and how they connect to other Coptic communities in Egypt and other migrated countries. The following are what this research revealed: Members of Canadian Coptic diaspora community are relatively highly educated and economically wealthy. Many of them feel they get along with Canadian society. On the contrary, among French community, first generation who migrated to France at their own will is not relatively well off and is not able to use their working skills they earned in Egypt. A lot of them tend to feel they are isolated and alienated in French society. Japanese Coptic Orthodox Church has just opened in 2016 and a lot of members are graduate students or expatriate or temporal employees.

研究分野：宗教学、中東研究、ディアスポラ研究、移民研究、コプト・キリスト教研究

キーワード：コプト・キリスト教 ディアスポラ 移民 エジプト カナダ フランス

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

アラブ諸国は2011年のいわゆる「アラブの春」（現地では「アラブ革命」と呼ばれることが多い）により政治社会が大幅な変化の途上であり、革命にともなう欧米諸国への移民の増加については国際社会が注目している。エジプトはアラブ地域の主要国のひとつであり、イスラーム世界の中心地のひとつとしても知られているが、人口の85～90%をムスリムが占める一方、残りの10～15%の人々は、2000年以上の歴史を持つコプト正教（コプト・キリスト教）を信仰する。コプトという語は、ギリシア語で「エジプト」を意味する語「アイギュプトス」に由来し、現代のエジプトにおいてはエジプト人キリスト教徒を意味する。1950年代以降、コプト正教徒（以下コプト）たちのなかでは欧州、北米、豪州等、エジプト以外の地域に移住する者が増加し、今や、多くの国に大規模なコプト・ディアスポラ共同体が存在する。

### 2. 研究の目的

本研究は欧米に移住したコプト・キリスト教徒を「コプト・ディアスポラ」としてとらえ、カナダとフランスのコプト・ディアスポラ共同体、そして母国のエジプトのコプト共同体の調査を通じ、そのネットワーク形成とホスト社会への適応の過程を解明することを目的とした。

ディアスポラとは、もともとギリシア語に由来する語であり、古代ギリシアでは移住や植民という意味で使われていた〔駒井2010: 3〕。転じて、バビロン捕囚と古代エルサレムの神殿崩壊以降は、パレスティナから離散したユダヤ共同体のことを指すこととなり、長らくディアスポラとはそのようなユダヤ人の経験や離散状況に置かれた彼らの状況を指す語であった。しかし、その後、この語はアルメニア人やパレスティナ人、アフリカ系アメリカ人といった生まれ育った土地からの強制的な離散を経験した民族や集団に対しても用いられるようになった。そして、グローバル化が進む今日においては、なんらかの理由で外国に定住しつつも、集合的アイデンティティを共有し、祖国や第三国の同一エスニック集団との連帯を持つ共同体や人々をも包含する概念として用いられている〔コーエン2012: 34-35〕。そこで、本研究では、移住先に数十年にわたり定住し、子や孫をもうけても、なお、母国エジプトや第三国の同胞とのつながりを積極的に保ち、非エジプト／非コプト的環境においてもコプト的伝統を維持している海外のコプトたちの存在を「ディアスポラ」としてとらえ、研究調査の対象とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、毎年度、フランスもしくはカナダに10日から15日程度滞在し、代表者が継続して調査を行っている特定のコプト正教会のミサや教会のユースグループをはじめとした小グループのミーティング等に参加するとともに、コプト家庭を訪問し、ときには滞在しながら、参与観察やインタビュー調査を行った。

なお、当初の研究予定ではエジプトも調査地のひとつとしていたが、代表者が長年調査しているミニヤ県の聖サミュエル修道院が2017年、2018年と2年つづけて複数の死者・負傷者を出すテロリズムの対象となるなど、宗教をめぐるエジプトの国内情勢が安定しなかったため、本研究の期間中には現地調査を見送った。

他方で、2016年に京都府木津川市に日本初のコプト正教会が開堂したため、同教会のミサや日本在住のコプト正教徒の信仰実践の調査を通じて、日本のコプト・ディアスポラ共同体の状況を新たな研究対象に含めることとした。

### 4. 研究成果

カナダにコプト正教会がはじめてできたのは1964年のことで、2019年時点で50教会、1修道院が存在し、多くはオンタリオ州とケベック州に位置する。本研究においては、モントリオール市の西にある1989年に開堂された聖ジョージ聖ヨセフコプト正教会の共同体の調査を行った。敷地内に2つ以上の教会堂があり、毎週日曜日のミサには数百人の会衆が出席する、大規模な教会である。本教会の調査からは、以下のことが明らかになった。1) カナダの移民受け入れ政策に基づき、一定以上の収入や学歴、能力のある者のみが移民として受け入れられるため、信徒の多くはカナダに住み始めた時点ですでに経済力があり、医師やエンジニアなど安定した職業に就いている。2) 第一世代（自分の意思で移住してきた世代）、第二世代（親の移住に伴い幼少期に移住したか、移住先で生まれた世代）、ともに教会での様々な活動に熱心である。3) 「コプト＝エジプト人キリスト教徒」という前提にとらわれることなく、非エジプト系信徒も受け入れることにより、ホスト社会に対して開かれた共同体として機能している〔岩崎2017〕。

一方、フランスのコプト・ディアスポラは異なる様相を呈する。2019年時点でフランスには7教会が存在し、多くはパリを中心としたイル＝ド＝フランス地域圏に位置する。本研究ではパリ市南郊のヴィルジュイックに位置する1998年に開堂された大天使ミカエル聖ジョージコプト正教会を調査対象とした。毎週日曜日のミサには100人から150人程度の信徒が出席する。本研究の調査からはつぎのことが明らかになった。1) 第一世代は専門的な職業に就いている者はあまりおらず、経済的に豊かな家庭もあまり多くはない。他方で、第二世代はフランスの

大学を卒業し、医師や大手企業社員などとして勤務しはじめた者もいる。2) 第一世代は教会の諸活動に熱心だが、第二世代は親とともにミサには来るが、それ以外の活動にはあまり熱心に参加しているようには見受けられない。3) 会衆のほとんどがエジプトに出自を持つ信徒である。数少ない例外はそうした人々と結婚したフランス人であるが、人数は非常に少ない。4) 現代のフランスでは中東やアフリカからの移民の周縁化が問題となっており [宮島 2006]、本調査でも、フランス社会から疎外されているという感覚を持つインフォーマントが少なくなかったが [岩崎 2017]、その一方で数少ない非エジプト系信徒のなかにはエジプト系から疎外されていると感じている者もいた。

最後に日本のコプト・ディアスポラについての考察を行う。日本では2016年に京都府木津川市に初のコプト正教会が開堂された。聖母マリア聖マルココプト正教会と名づけられたこの教会はオーストラリアのシドニー教区の管轄下にあり、2017年には総主教タワードロスⅡ世が来訪し教会の聖別を行うとともに、シドニー教区から常駐司祭が派遣されることとなった。2019年現在、ほぼ毎週日曜日に京都の教会堂でミサを行うとともに、月に1回程度は東京の聖公会の教会堂を借り受け、ミサを行っている。京都のミサには関西や中部、中国地方在住のコプトが出席する一方、東京のミサには関東在住のコプトのほか、コプト正教会と同系統の宗派であるエチオピア正教会の信徒も出席している。通常のコプトのミサの出席者は、どちらの地域も10～15人前後、復活祭等の主要祝祭のミサには50人前後が出席する。この教会の特徴はつぎのとおりである。1) 職業別にみると、①修士、博士各課程に所属する大学院生、②大学研究員・教員といった教育・研究にかかわる人々が半数以上を占める。それ以外には、③日本企業会社員、④自営業、⑤①～④の配偶者や子どもに大別できる。高学歴で経済的に恵まれた信徒が比較的多い。2) 民族的には、エジプトにルーツを持つ人々が大半だが、先述のエチオピアにルーツを持つ人々、また、エジプト系の人々の配偶者である日本人、改宗した日本人、エジプトと日本2か国にルーツを持つ子どもたちに分けられる。また、ロシア正教会など異なる宗派の信徒がミサに出席することもある。3) ミサ以外にも親睦活動が行われ、エジプト系も非エジプト系も参加している。日本のコプト正教会は開堂されたばかりで、その会衆はカナダやフランスと比較するとごく少数ではあるが、今後のこの宗教コミュニティーの発展は、コプト・ディアスポラの創生と展開をリアルタイムで目撃できるという点、また、外国人受け入れにおいて過渡期にある日本における移民と宗教という点において、極めて重要な事例となるだろう。

いずれの国のコプト正教会も、エジプトの総主教を頂点とするコプト正教会の全体的組織のなかの一部として機能しており、頻繁にエジプトから修道士や司祭が派遣される。また、様々な国のコプト・ディアスポラ同士のつながりもあり、互いの教会を訪問することもある。

本研究が明らかにしたカナダのコプト・ディアスポラが収めつつある成功、フランスのコプト・ディアスポラが抱える課題、また、誕生したばかりの日本のコプト・ディアスポラの展開は、今後、世界各地で移民が増加していくなかで、より重要な意味を持っていくと考えられる。

#### <引用文献>

- ① 岩崎 真紀、コプト・ディアスポラの発展——カナダのコプト・キリスト教徒移民を事例として、三代川 寛子編著、東方キリスト教諸教会 基礎データと研究案内、明石書店、2017、97-121
- ② コーエン、R.、駒井 洋訳、新版グローバル・ディアスポラ、明石書店、2012
- ③ 駒井 洋監修・宮治 美江子編著、中東・北アフリカのディアスポラ、明石書店、2010
- ④ 宮島 喬、移民社会フランスの危機、岩波書店、2006

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 2 件)

- ① Maki Iwasaki, Immigrants and Religious Community: Coptic Christian Diaspora in Canada as a Case Study, Tunisia-Japan Symposium on Society, Science and Technology (TJASST) 15, 2016
- ② 岩崎 真紀、コプト・ディアスポラにおけるユースグループの役割、日本宗教学会第74回学術大会、2015

[図書] (計 4 件)

- ① 岩崎 真紀、現代コプト正教会における聖人崇敬に関する一考察、三代川 寛子編著、東方キリスト教諸教会 基礎データと研究案内、明石書店、2017、83-96  
(次の論文の再録: 岩崎 真紀、現代コプト正教会における聖人崇敬に関する一考察、三代川 寛子編著、東方キリスト教諸教会 基礎データと研究案内 (増補版) SOIAS [Sophia

- ② 岩崎 真紀、コプト・ディアスポラの発展——カナダのコプト・キリスト教徒移民を事例として、三代川 寛子編著、東方キリスト教諸教会 基礎データと研究案内、明石書店、2017、97-121
- ③ 岩崎 真紀、エジプトにみる聖家族逃避行伝承をめぐる宗教共存——ムスリムとコプト正教徒の関係——、小原 克博、勝又 悦子編、宗教と対話——多文化共生社会の中で、教文館、2017、131-161
- ④ 岩崎 真紀、イスラーム世界のマイノリティ——ディアスポラのコプト・キリスト教徒——、塩尻 和子編、変革期イスラーム社会の宗教と紛争、明石書店、2016、263-283

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

[その他] (計 4 件)

学会発表報告要旨

- ① 岩崎 真紀、コプト・ディアスポラにおけるユースグループの役割、宗教研究 89 巻別冊、2016、265
- ② 岩崎 真紀、イスラーム社会における宗教的マイノリティ、宗教研究 88 巻別、2015、65

エッセイ

- ③ 岩崎 真紀、イスラームとキリスト教からみる宗教共 (Al-ta‘āīsh bayna al-’islām wa al-masīḥīyah fī al-sharq al-’awsaṭ)、タワースル 絆 Tawāṣul、7 号、アラブ・イスラーム学院同窓会、2018、39-40 (日本語、アラビア語併記)
- ④ 岩崎 真紀、コプト・ディアスポラにみる正教会の新たな姿、季刊アラブ、157 号、日本アラブ協会、2016、22

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8桁) :

(2) 研究協力者

研究協力者氏名 : なし

ローマ字氏名 :

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。